



徹底研究

おはなし会プログラムのつくり方

おはなし会に携わるみなさんにとって、プログラムづくりは楽しさもある半面、頭を悩ませる場面も多いことでしょう。ほかの人たちはプログラムとどう向き合い、どんなふうにつくっているのでしょうか。JRAC*のみなさんを中心に実施したアンケート調査をもとに、プログラムづくりの極意と実例をご紹介します。

おはなし会

みんなは
こうしている
プログラムの
組み立て方

徹底研究

● 季節や対象年齢を考慮して、候補となる本を選びます。導入に使う短い作品、中間の作品、メインとなる作品、参加型の作品、仕掛け絵本、大型絵本。候補がそろったところで、どういう順番にするか考えます。

● 対象に合わせてまずメインとなる本を1冊選びます。次にほっとひと息できる本、言葉遊びや参加型の本を入れ、科学ものや写真絵本、季節感のあるもの、手遊びなどを組み合わせて時間調整します。

● 導入（詩、手遊び）を工夫することでおはなしを聞く準備ができます。長いものと短いものを組み

合わせ、日本のおはなし、外国のおはなし、古典、新しいものなどバランスを考えます。

● どの本がつかみに使えるか、じっくり聞かせたいおはなし絵本はあるか、じっくり絵を見せたい絵本はあるか、何がふさわしいかを確認し、長短や絵柄のバランスなどを考え、一貫した流れを意識し、組んでいきます。

● メインの本→オープニング（歌、手遊びなど）、最初の本→エンディングの順で選書。いったん基本プログラムを組み立てたあと、突然のトラブルや子どもたちの雰囲気が変わったときのために補欠の本を1冊ずつ準備します。

● おはなし会のテーマを考えます。季節、年齢、聞き手が慣れているかどうか、などの状況を把握してから絞り込みへ。テーマに沿った軸となる本を1冊決め、流れを考えながら数冊を選んでプログラムを組み立てます。



イラスト/アンヴィル 奈宝子

教えて！

おはなし会での 成功談

● お子さんと一緒に参加された保護者の方にも参加型の絵本を楽しんでもらったときのこと。読んで本だけでなく、ほかの絵本も購入していただくきっかけになりました。

● 偶然通りかかったお子さんが気に入ってくれて、その後、何年間もおはなし会に参加してくれました。書店ではこのようなことが多いです。

● 親子向けのおはなし会の最後に、親向けの啓発としてその日のワンポイントトークを行っています。たとえば、小さな子どもたちの繰り返し読みこたえてあげて、などです。お母さんたちが中心ですが、とても興味をもってもらえて、質問なども飛び出します。

● わらべ歌を入れたときのこと。母親が子どもに歌って聞かせているのを見て、こういうのもいいなと思いました。発声練習を怠らず、大きな声で読むことが成功のカギ！ 子どもも付き添いの大人たちも集中して静かに聞いてくれます。

● 中学校へおはなし会に行きました。長い間、地域で保育園、小学校とおはなしを続けていたので、中学校でのおはなし会は久しぶりに生徒さんたちと会う時間となりました。おはなし会が終わってからも懐かしいといっって、絵本を手にとって見ていたり、近況を話してくれたり、私の体のことまで気づかってくれる生徒さんがいました。あとで担任の先生が話してくださったのは、反抗期の生徒さんたちがふだんの授業や生活では見せないやさしい明るい表情をしておはなしを聞いていたということ。うれしい時間でした。

*当財団（JPIC）では読書を通して国民の生涯学習推進・読書活動の推進のために、1993年より「JPIC 読書アドバイザー養成講座」を開設。読書や出版について体系的に学習する講座です。JPIC 読書アドバイザークラブ（JRAC）とはこの講座の修了生の有志により自主活動しているクラブ。全国に約650名が在籍、地域のおはなし会などで活躍しています。



おはなし会

プログラムをつくる時
気をつけている
のはこんなこと

徹底研究

- 同じ内容のものが続かないように変化をもたせませす。子どもを飽きさせない工夫が大事。
- 遠くからでも見やすい、文章が多すぎないなど、絵本のわかりやすさに注意しています。
- 流れとメリハリをつけること。長いおはなしのあとには、声を出してやりとりする参加型や仕掛け絵本などで気分を変えます。時間内できっちり終わるようにするのもポイントです。
- 実際のおはなし会では子どもの年齢や様子が予定のプログラムと合わないこともあるので、予備の本を用意して、差し替えのプログラムも考えておきます。

おはなし会

新しい本の
情報はこうして
キャッチ

徹底研究

- 数社の児童書の出版社からチラシなど新刊情報を送ってもらっています。

- 年齢や様子が予定のプログラムと合わないこともあるので、予備の本を用意して、差し替えのプログラムも考えておきます。
- 方向性の違うおはなしばかりでは聞き手が困惑します。「春のおはなし」「主人公が冒険するおはなし」など、大まかでいいので、選書にテーマや共通点があれば、おはなし会にまともりが生まれます。
- プログラムに沿って大まかにタイムを計っておきます。参加者が飽きないよう共感型、参加型のプログラムにも気を配り、一方的なおはなし会にしないこと、演じ手が自己満足に陥らないことを肝に銘じています。
- メインのおはなしが長くならないようにすること、同じような内容や技法が続かないようにすること、約束の時間内で終われるようにすることの3つです。

- J R A C 関西支部のニュース（毎月発行）の中に出版社からの絵本チラシがあります。また、新聞や「母のひろば」（童心社の月刊情報誌）、大阪府子ども文庫連絡会の年9回の講座なども活用中。
- 出版社からの案内、「この本読んで！」など。公立図書館よりも情報が早いので、実際に書店にも足を運びます。
- 絵本ナビや出版社のサイト、新聞、雑誌などで気になった絵本をチェックしておき、それらの本が図書館にあれば実物を手にとってみます。
- 書店や図書館の新しい本コーナーで気になった本はメモをします。次のおはなし会のテーマや季節に合っている場合はすぐ使うことも。新しい本は時代を映しているものがあり、マンネリ化を防ぐためにもチェックは必至。
- 図書館・児童館でのほかの人の読みかきを見学したり、同じ地域の読書アドバイザーと情報交換したりしています。
- いくつかの公共図書館の新作図書コーナーを見てまわります。また書店の絵本コーナーで気になった本を手にとり、目を通してみます。どちらでもこれだ！と感じた本は必ず購入して、手元に置いておきます。必要なときにすぐ使えるようにしておくことが大切。

教えて！

おはなし会での失敗談

- 書店のおはなし会で、赤ちゃん連れの親子が来てくれたのですが、赤ちゃん絵本を準備していなかったのであわてました。
- 私の十八番は誰でも大好きだと思って読んだのですが、子どもたちにシラケられたことが……。読み手の思い込みはダメですね。
- 事前の打ち合わせができていなくて、ヘアの読み手と私、ふたりとも持ってきた本が少なめ……。書店さんなら本を借りることができそうですが、ほかではできないので、打ち合わせは入念にしておくてはならないと再認識。
- たくさん読んであげよう！と意気込んでプログラムを詰め込み、早口にならないように注意していたものの、ページ送りを速くしすぎたことがありました。聞き手にとってたぐさんの本を紹介されることよりも、絵を読みとったり、余韻を味わったりする時間が確保されていることのほうが大切なのだと知りました。
- 紙芝居や大型絵本を用意していないプログラムのあるときに、いきなり「今日は大ホールでお願いします」と言われてあせりました。スタンドマイクが用意してあったので、汗をかきかき手遊び歌などをしました。
- 自分の心にストンと落ちないおはなしだったのに、書評などで評判がよかったので読みかきせをして失敗したことがあります。子どもたちは正直です。読み手側の不消化な思いは伝わってしまうのです。やはり自分で納得がいかない本は読むべきではないと痛感しました。



この人にあれもこれも

絵本作家さん
こんにちは!



「からすのパンやさん」
などでおなじみ!

かこさとし
加古里子さんスペシャル

遊び、学び、生きていこう

戦後の子どもたちの役に立ちたいとの一念から子どもの世界に飛び込み、今も研鑽を積んでいる加古里子さん。1959年に初の絵本を出版して以来、半世紀以上にわたり見つめ続けてきた子どもの本来の姿についてお聞きしました。

撮影/石川 正勝 取材・文/菅原 千賀子

豊かな自然と過ごした幼き日
福井で遊んだ思い出の8年間

僕の生まれは福井県の武生です。小さいころは遊ぶものがない時代でしたから、相手をしてくれるのはずっと上の「あんちゃん」たちで、僕はいわゆるみそっかす。

でも神さまのご配慮なのでしょね、すぐそばにはバツタやホタルなどいくらでも遊んでくれる存在がありました。「ゴリ」と呼ばれていたカワハゼは、子どもでも捕まえることができました。河原の石をどけて、そーっと近づいてはっと捕まえる。向こうだって命がかかっていますから必死に逃げる、こっちも追う。失敗すると「しもうた、もういっぺん!」と逃げた先を追いかけていましたね。真剣勝負ですよ。

なんでも簡単にできてしまうのはつまらないものです。そこがこの遊びのいいところでした。真剣さが非常によかったわけです。自然環境に恵まれた武生で、幼少期を過ごすことができたのはとてもいい思い出です。

のちに子どもさんに関するいろいろなお仕事に携わったときに、「ホタルはこういう生きもので……」なんて話すことができるのは、この福井での体験があったからこそなのです。

絵本作家さんの夏休み

@青森



夏祭りといえば、祇園祭や仙台七夕まつりなど有名なお祭りが数多くありますが、青森では、そう、ねぶた祭です。絵本作家の長野ヒデ子さんが、今年の夏は念願の青森県五所川原での立佞武多を見に行くとお聞きしたので、ご一緒させていただきました。

左から村中さん、中川さん、長野さん
そろって「へそへっへのうた」を披露。



左上/どーんとそびえる立佞武多。
右下/思いっきりはねて楽しめました！



長野さんのお誘いで集まったのは、絵本作家の中川ひろたかさんと、村中李衣さん。せっかく集まるのだし、お祭りは夜だから昼間は子どもたちとふれあう機会をと、おはなし会が開かれました。会場となる五所川原のひまわり幼稚園に足を踏み入れたとたん、3人から「おーっ！」と喜びの声が。教室の壁に中川さんの「たねぶたくん」の絵がずらり！「これはなかなかの力作だ」と、みなさんうれしそうです。そして、トイレには長野さんの「たいこさん」がいるではありませんか！ どうやら園のスタッフに長野さんのファンがいて、以前からたいこさんトイレなのだそう。記念にパチリ。そうしている間に、教室は親子連れのお客さまでいっぱい。

では、おはなし会のはじまり、はじまり〜！ 3人がそれぞれ自分の作品を読み、最後にはご当地ものの登場です。中川さんの「たねぶたくん」と最新作の「いぶりがっこちゃん」。こ

の五所川原でこれをやらすして終われません。中川さんの読みきかせのあと、「これ、歌があるんだよ」と、CDに合わせてみんなに振り方を教えながら歌い、「たねぶた音頭といぶりがっこちゃん音頭、みんなで輪になって踊ろう！」。教室が、たちまち盆踊り会場に早変わり。ある歌詞の部分で毎回みんなが大爆笑してしまっておもしろい盆踊りで、子どもも大人も楽しんでおはなし会はお開きとなりました。ひと休みして夕方。これから挑むのは五所川原名物の立佞武多祭り。おはなし会の運営でお世話になった、NPO法人子どもネットワーク・すてつぶの辻悦子さんたちにご指導いただき、はねと姿に変身！ 昼間おはなし会に来てくれた親子も、さすが地元の方、顔つきがどこか凛々しくなっていました。

スタート地点に行くくと、通りのあちこちに立佞武多が並んでいて、迫力満点です。高さ22m、重さ17tの五所川原名物の巨大立佞武多3台のほかにも、何台もが列をなして町を練り歩きます。日が暮れ始めて、とうとう行列が動き始めると、縄を引く人はねる人、太鼓を鳴らす人、それぞれが自分の役目を果たします。長野さんたちも「やってまーれ！ やってまーれ！」と、大きな声を出しながら、地元のみなさんと一緒にはねていました。その様子は次のページの絵日記でお楽しみください！

長野 ヒデ子

ながの・ひでこ

絵本作家。代表的な作品に「とうさんかあさん」(石風社)、「おかあさんがおかあさんになった日」や「せとうちたいこさんデパートいきタイ」(ともに童心社)など多数。



『せとうちたいこさんデパートいきタイ』
作/長野ヒデ子
1,300円(童心社)

中川 ひろたか

なががわ・ひろたか

絵本作家、バンド「トラや帽子店」や「下中商会」でミュージシャンとしても活躍中。作品に「さつまのおいも」(童心社)、「8月6日のこと」(ハモニカブックス)など多数。



『たねぶたくん』
文/中川ひろたか
絵/村上康成
1,200円(角川学芸出版)

村中 李衣

むらなか・りえ

梅光学院大学教授。読書療法として「絵本の読みあい」を実践している。作品に「絵本の読みあいからみえてくるもの」(ぶどう社)や、絵本「くつしたのはら」(日本標準)など。



『うんこ日記』
作/村中李衣、川端誠
1,200円(BL出版)



はねと姿に着替えて準備万端！

著作権保護コンテンツ

「世界の言葉で「ありがとう」って どう言うの？」

3・11東日本大震災。被災地には、世界中から救援隊がやってきてくれました。その人たちに、その国の言葉で「ありがとう」を言いたい！ そんな思いで企画されました。「ありがとう」は、人間関係の潤滑油ともいえる言葉です。



著/池上 彰、稲葉 茂勝
1,200円(今人舎)

「ぺんちゃんのかきごおり」

かき氷の大好きなペンギンのぺんちゃん。「もっともっと大きい」と、特大の氷を用意してもらいます。しゃりしゃりしゃりしゃつ、涼しい音をたててできあがり。シロップはメロンにイチゴにオレンジ……。どれもおいしそうで、迷ってしまいます。



作/おおい じゅんこ
1,000円(アリス館)

「あかにんじゃ」

まっ赤な姿のあか忍者は、秘密の巻物を狙いお城に忍び込みますが、その目立つ姿ゆえ、侍たちに追われてしまいます。あわや捕まるときに大変身で、次から次に危機を乗り越えていきますが……。最後はまっ赤な夕焼けに。そして、あか忍者は今いずこ？



作/穂村 弘
絵/木内 達朗
1,300円(岩崎書店)

「オオカミがとぶひ」

びゅうびゅうと風が強く吹くのは、オオカミが駆け回っているからです。カミナリはゴリラが胸をたたいている音だし、逆立った髪はハリネズミのしわざです。自由な発想で描かれた動物たちはエネルギーにあふれ、本から飛び出してきそうです。



作/ミロコ マチコ
1,400円(イースト・プレス)

「しげるのかあちゃん」

しげるの母ちゃんは、つけまにマスカラ、茶髪にストパーというルックスで、2トントラックを乗り回すカッコいい母ちゃんです。しかも、どんな工具も使いこなせるし、困ったときはみんなを助けてくれる、世界一の母ちゃんなのです。



作/城ノ内 まつ子
絵/大畑 いくの
1,300円(岩崎書店)

「おにぎりゅうしゃ」

ハルタくんはおにぎりが大好き。毎日食べ続けていたら、おにぎりと友だちになりました。おさらがめの国で、タコペエが暴れていることを知ったハルタくんは、おにぎりの魔法で大きくなったり小さくなったり、タコペエをやっつけます。



作/山崎 克己
1,300円(イースト・プレス)

ゼーんぶプレゼント
2012年6、8月に発売された新刊絵本の中から、読みかきせにもおすすめの100冊を選びました。
子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。
プレゼント応募はアンケート用紙、またはウェブから。

もっと読んだっ？

新刊
100
!!

※出版社五十音順



マークは乳幼児から、



は中・高校生も楽しめる本です。

「ぐるぐるカレー」

まあるいお鍋に、野菜を切ってポンポン入れていきます。コトコト煮たらルウを入れてぐるぐるかき混ぜます。もっともっと回して回して……。そうやってみんなのカレーのできあがり。擬音が効果的に使われているので、声に出して読みたくなります。



作/矢野 アケミ
950円(アリス館)

「ひまわりのおか」

大津波で74人もの尊い命が奪われてしまった石巻の大川小学校。子どもたちが避難しようとしていた丘に、お母さんたちはヒマワリを植え始めました。太陽に向かって育つヒマワリにわが子の姿を重ねたお母さんの手紙をもとにして、この本はつくられました。



文/ひまわりをうえた
八人のお母さんと
葉方 丹
絵/松成 真理子
1,500円(岩崎書店)

「きょうりゅう、えらいぞ」

はるか大昔、地球はトラック恐竜たちに支配されていました。石ころをまき散らすダンプロドゥーカス、なんでも踏みつぶすローラードン、どこでも掘り返すショベルサウルス……。働く車にそっくりの恐竜たちの世界を探検してみましょう。



作/クリス・ゴール
訳/西山 佑
解説/小島 郁生
1,600円(いそっぷ社)

「だっこ」

「だっこの時間の始まり、始まり」と、10組の動物の親子のだっこが登場。厳しい大自然の中にあっても、ほのほのとしたあたたかい営みを感じられる貴重な写真絵本です。パンダもペンギンもカンガルーももっと身近に感じられることでしょう。



作/なかの ひろみ、
まつもと よしこ
1,300円(アリス館)

著作権保護コンテンツ

「ぼうしとつたら」

帽子をかぶった人が次々出てきます。男の子、奥さん、博士やコックさん。帽子の部分を上にめくれる仕掛け絵本です。船乗りさんの帽子をとつたら、なんと、頭にタコが！ 何度読んでも飽きない楽しさです。



作/ tuperu tuperu
950円(学研教育出版)

「おもいのたけ」

タヌキたちがキノコに向かって思いを吐き出すたびに、キノコはどんどん大きくなります。みんなの思いを浴び続けたキノコは、空に上がり美しい花火のように爆発しますが、気づくと何ごとでもなかったような夕暮れで、動物たちはお祭りを再開します。



文/きむら ゆういち
絵/田島 征三
1,333円(えほんの杜)

「ぶちぶちまめこ」

枝豆が大好きなまめこ。枝豆を好きなら食べるためだったら、なんだってやる覚悟です。だから、畑に枝豆の種をまき、お祈りしました。「おいしいえだまめ、いっぱいできますように」。お節介な野菜たちが言うことも、やってみました。



作/川北 亮司
絵/相野谷 由起
1,300円(岩崎書店)

「れんげつガッチャン」

おサルさんの電車をダチョウさんの電車を、オーライオーライとタコさんが誘導してガッチャン連結。電車はコトンコトン進んでいきます。次々いろんな電車と連結して、最後はタコさんのディーゼル車で海の中へ。海辺に戻って終点です。



作/こぐれ けいすけ
1,000円(学研教育出版)

「かあさん ふくろう」

古いリンゴの木の巣穴で、母さんフクロウは卵をあたためています。28日たつて4羽のひなが生まれました。厳しい自然の中で親鳥はえさを取り、一人前になるように育てます。フクロウ家族の一年を美しい版画で描きました。



作/イーディス・サッチャー・ハード
絵/クレメント・ハード
訳/おびか ゆうこ
1,100円(偕成社)

「クイクイちゃん」

髪の毛は毛糸、体は布でできた人形クイクイちゃんは、おなかを押すとクイクイと音が出ます。ある日、海辺を散歩しているとタコさんに出会いました。タコさんの自転車のかごに乗せてもらって一緒にデパートに出かけます。



文/牧野 夏子
絵/佐々木 マキ
1,200円(絵本館)

「いぶりがっこちゃん」

アヒルのいぶりがっこちゃんと、ブタのたちねぶたくん。怖い顔をしたぼうが、かくれんぼの鬼になります。競って怖い顔をしますが、なまはげのたちねぶたくんにはかないません。東北地方の行事や名産が題材に。「いぶりがっこちゃん音頭」の楽譜つき。



文/中川 ひろたか
絵/村上 康成
1,200円(角川学芸出版)

「もりへぞろぞろ」

森に住む動物たちの仲間のイノシシが病気になりました。山の奥には病気を治す暗い森があります。みんなで神さまのいるまっ暗な森へぞろぞろ、ぞろぞろと行きます。命の水を飲み、おいしい風を吸って、イノシシも動物たちも元気になりました。



作/村田 喜代子
絵/近藤 薫美子
1,200円(偕成社)

「ふとんちゃん」

ふとんちゃんが空を飛んでいて、すつんと落ちたところから始まる奇妙天外なおはなしです。ユニークな動物たちが次々に現れます。言葉遊びが「それからどうしたの?」のセリフとともに、連なっていく。



作/きむら よしお
1,200円(絵本館)

「うみのどうぶつとしょかんせん」

動物村の図書館は、島のまん中にあります。動物たちは絵本と紙芝居が大好きです。浜辺に住む動物は、村長のトラさんに図書館をつくってほしいとお願いしました。そこでサルさんは、仲間と浜辺を回る船の図書館をつくります。



作/菊池 俊
絵/こば ようこ
1,200円
(教育画劇)

「ゆうだち」

夕立ちにあったヤギが雨宿りさせてもらったのはオオカミの家でした。オオカミは三味線を取り出して決してヤギを帰しはしないと恐ろしい歌を歌うのです。ヤギは機転を利かせ、オオカミからどうにか逃れようと、ひと芝居打つことにしました。



作/あき びんご
1,000円(偕成社)

「シーソーあそび」

公園に遊びに来た動物たちはシーソーが大好きです。それぞれベアになって楽しめますが、ゾウの相手がカメではシーソーは動きません。キリンやシマウマたちが乗っても動かず、ハチがキリンにとまると、やっとゾウはシーソー遊びができました。



作/エクトル・シエラ
絵/みぞぶち まさる
1,200円(絵本塾出版)